

ジュスティーン・ジュリエット物語における唯物論的世界観

鈴木球子

要旨

18 世紀から 19 世紀にかけてのフランスの作家、マルキ・ド・サドは、対称的な気質を持つ姉妹ジュスティーンとジュリエットの物語を、幾度も版を重ねて書いている。本発表では、これらの物語の中で、彼が 14 年にも渡って扱い続けた「迫害される美德と、繁栄する悪徳」というテーマを考察する。第一版・二版と第三版とでは、このテーマの書き方が異なり、そのことが物語に正反対の結末をもたらしている。このテーマはこれまでに、サドの宗教観とも関連させて様々に論じられてきたが、唯物論的世界観の影響と、それをあえて唯物論者らの目的とは異なった「悪徳の正当化」に用いているところに、彼の特有性を追及したい。唯物論に由来する「自然」という言葉に特に注目し、それが物語の中に登場する「自然描写」とどのように関連するのか、そして物語の流れと結末において、唯物論的世界観の徹底がどのような意味を持ってくるのかということを、登場人物達が唱える哲学論や彼らの性向や役割等に留意しながら、明らかにする。

はじめに

「迫害される美德」と「繁栄する悪徳」とは、マルキ・ド・サドが 14 年にも及ぶ長い時間をかけて扱い続けてきたテーマである。美德を信奉する女性ジュスティーンは、その性質がゆえに不運に巻き込まれ、貧乏のどん底に落とされ、雷に打たれて悲惨な最期を遂げる。一方、彼女とは正反対の性格である姉のジュリエットは、悪徳の道を選んだ結果、富み栄えて何不自由ない生活を送ることになる。この対称的な姉妹を描いた作品の最初の版、『美德の不運』は 1787 年にバスティーユ牢獄内において書き上げられた。フランス革命勃発後、釈放されたサドは、第一版を大幅に加筆・訂正し、1791 年に『ジュスティーン或いは美德の不幸』（以下、『美德の不幸』）と題された、第二版をパリのジルアール書店から出版している。更に 1799 年には『新ジュスティーン或いは美德の不幸』（以下、『新ジュスティーン』）という題で第三版を書き上げ、これに壮大な長編小説である、姉のジュリエットの物語『ジュリエット或いは悪徳の栄え』（以下、『悪徳の栄え』）を付している。1801 年に彼は「ジュスティーン・ジュリエット物語」という好色小説の作者として、執行政府の警察に逮捕されるが、その際に『新ジュスティーン』の新たな原稿を携帯しており、このテーマに対する彼の執着ぶりが伺える。

『美德の不幸』は 10 年間で 6 回も刊行されており、売れ行きは悪くなかったものと推測される。またサド自身も 1791 年 6 月 12 日の弁護士のレイノーへの書簡の中で「私は金が必要だったのです。出版者はみだらな小説を要求してきましたので、私は悪魔を毒することができそうなものを書いたのです。それは『ジュスティーンあるいは美德の不幸』という題名です。¹」と述べており、このテーマへの彼の固執を、経済的問題に帰することも可能なように思える。しかし、バスティーユ牢獄に収監中の 1787 年には（収監自体は 1784 年 2 月 29 日～1790

¹ SADE, *Œuvres complètes du marquis de Sade*, l'imprimerie française des arts graphiques, éd. copie, 1964, p.488

年4月2日)彼はすでに第一版を書き終えており、翌年の1788年には更にそれを長編小説に仕立て直そうと、計画まで立てているのである。また延々と繰り返される悪事を描いた、いわば悪事の一覧表とも呼べる『ソドムの百二十日』も、『美德の不運』に着手する前に書き上げられており、「繁栄する悪事」についてのこだわりが、出版者の意向と、経済的理由ばかりを原因とするのではないことは明らかである。

ではなぜ、サドはこの命題をかくも重要視したのだろうか? クロソウスキーは「サドの体系の素描」の中で、「この作品(『美德の不運』)は、その後の版(第二版・第三版)の無政府主義傾向を持つ哲学の諸要素を既に含んでいるが、依然としてキリスト教の根本的教義の頌揚として呈示されているのである。つまり、罪ある者のための無実の者の犠牲という功德転用の教義である。²⁾」と述べ、キリスト教の「贖罪」というテーマを、「迫害される美德と、繁栄する悪徳」という命題の根底にあるものと解釈している。

しかし、バタイユは『文学と悪』において、クロソウスキーを「キリスト教徒のクロソウスキー」と呼び、この解釈に疑問を呈している。『『サドとフランス革命』についての論文と、『サドの体系の素描』』の中で、ピエール・クロソウスキーは、『ジュスティーン』の作者について、いささか造り上げたイメージを与えたのではないかと思われる³⁾。クロソウスキーは、共和主義国家は犯罪の上に基礎付けられなければならないと説く、サドの『閨房哲学』の中のある文章を元に、神の死の代用物である国王の死刑執行の上に基礎付けられた革命政府への批判を導きだしている。実際、サドは自身の書簡の中で、アンチ・ジャコバンを思わせる文章を書いており、革命に対して決してポジティブな立場を取っていなかったのは確かなようである。だが、バタイユに言わせれば、『閨房哲学』の文章は破壊行為と悪とを考慮に入れようとしないう人類の錯誤を思い知らせるための「単に一つの論理的な指摘」であり、登場人物の一人(ドルマンセ)によって語られている論議にすぎないので、それをサドの思想の代弁と見なし、共和主義の原理に含まれている欺瞞の暴露へと直結させてしまうのは、やや性急過ぎることになる。

『美德の不運』の序文で、サドは以下のように述べている。「まだいくばくかの徳義心を残している魂に、不幸な美德の実例を示してやれば、美德の路において、もっとも輝かしい榮譽と、もっとも喜ばしい褒美を与えられたのと同じように、確実にその魂を善に立ち返らせることができるというのを教えることが肝心なのである。⁴⁾」「不幸な美德の実例」とはすなわち、ジュスティーンのことであり、「まだいくばくかの徳義心を残している魂」とは、悪徳の道を選んだジュリエットのことである。物語の最終部で、ジュスティーンは雷に打たれて命を落とす。彼女の死は第一版・第二版においては、ジュリエットの悔恨を促し、彼女を美德の道に立ち返らせることができる。つまり、最初の二つの版の結末のみに注目すれば、クロソウスキーの論は理解できなくもない。しかし、『新ジュスティーン』の最終場面において、監獄に入れられたジュスティーンはそこから逃亡するために隣人の財布を盗み、それを牢屋番に手渡している。つまり、彼女は悪徳の前に膝を屈することになるのだ。また、『悪徳の栄え』の結末でジュスティーンを死の前にして、ジュリエットは心を改めるところか次のように叫んでいる。「かつてないほど、私が生涯辿ってきた道に打ち込む決意が固くなったわ。おお、自然よ！」

² KLOSSOWSKI Pierre, *Sade mon prochain*, éd. Seuil, 1967, p.96

³ BATAILLE Georges, *La littérature et le mal*, éd. Gallimard, 1957, p.85

⁴ SADE, *Œuvres, Les Infortunes de la vertu*, éd. Gallimard, la Bibliothèque de la Pléiade, tome II, 1995, p.4

「お前の計画には犯罪が必要なね。馬鹿者たちは犯罪を厳しく取り締まろうなどと思っているけれど、お前は犯罪を望んでいるのだわ。犯罪を恐れ、犯罪に没頭しようとしないうる人たちを、お前はこんな風にして罰するのですもの。⁵⁾

ここで、『美德の不運』の数年前に書かれ、サドのジュスティーン・ジュリエット物語と並んでスキャンダラスな作品と呼ばれることの多い、ラクロの『危険な関係』(1782)に目を向けてみよう。序文でラクロは、「品行方正な人たちを墮落させるために、悪人たちが用いる手練手管を暴露することは、少なくとも良俗に貢献することだと思われる。⁶⁾」と述べている。ミシェル・ドロンはこの序文に対し、「多くの作家が、彼らのフィクションの道徳的有用性を準拠としている。⁷⁾」と注を付しており、『作詩狂』を表したピロンをその同類の例としてあげている。すなわち彼の言に従えば、『美德の不運』の序文の説明も、必ずしも文字通り解釈できるものではなく、サドの本意を汲むものとして受け取れるものではない。

唯物論と自然

ジュリエットとジュスティーンの世界の中では、悪人達が語る悪徳の哲学と、大饗宴の様子とが交互に描かれている。前述の通り、第3版においてジュリエットは最終的に「自然には犯罪が必要だ」という結論に至るわけだが、この「自然」とは、悪人達が悪徳を正当化するために、それぞれの哲学論議の中で頻繁に用いている言葉なのである。

ジュリエットは妹のジュスティーンと共に、パリ有数の高名な修道院で育っている。彼女に妹と訣を分かつたせ、悪徳の道へと嵌まり込むきっかけを与えたのは、修道院長のデルベヌである。彼女はジュリエットに、スピノザとヴァニニの『自然の体系』を勧めている。プレイヤード版の『悪徳の栄え』の注には、「サドは、J.B.ミラボーの名の元で刊行された『自然の体系』の著者（ドルバック）を知らなかったのかもしれない。⁸⁾」と記されている。実際、デルベヌ院長によって語られる哲学論議のほとんどが、ドルバックの『良識』と『自然の体系』、そしてドルバックによって著者の死後に刊行されたニコラ・フレールの『トラシブルからレシブへの手紙』を抜粋・要約したものである。つまり、ここでのヴァニニとはドルバックの誤りだと考えられる。

むしろ、サドのテキスト（特に悪人達の哲学）に影響を与えている書物は数知れない。些細なパロディまでを含めると、ヴォルテールやロック、百科全書派などの著書を限りなく挙げていくことができる。しかし、デルベヌ院長は『悪徳の栄え』の冒頭、つまりジュリエットの物語の始まりにおいて、彼女が今後の指針としていくのに拠り所とすべき思想としてこの二人の唯物論（汎神論的唯物論と機械論的唯物論）を挙げており、その重要性を決して見過ごすことはできないだろう。

ドルバックによる唯物論の影響の一例として、魂に関する論議を検討してみたい。デルベヌ院長は魂と肉体は本質的に同じものだという見方をしており、よって肉体が死ねば魂もまた滅びるのだとして、魂の不滅性を否定している。他方ドルバックも、魂が肉体から区別されず、肉体と共に成長・変容し、肉体と共に滅びることを明言している。魂の不死性を否定するとい

⁵⁾ SADE, *Œuvres, Juliette ou les prospérités du vice*, éd. Gallimard, tome II, 1998, p.1259

⁶⁾ LACLOS, *Les Liaisons dangereuses* (1782), Librairie Générale Française, éd. copie, 2002, p.42

⁷⁾ *Ibid.*, p.42

⁸⁾ SADE, *Œuvres, Juliette ou les prospérités du vice*, op. cit., tome III, p.1392

うことは、向き合わねばならない世界を現世だけに留め、来世を待望することの否定である。それはつまり、ある存在が自らの主体性に拘り、死後も自己同一性を保ち続けたいと願うのを認めないことでもあるのだ⁹。

この段階ではまだ初心なジュリエットは、来世への希望を絶たれることに怖気づく。それに対してデルベヌは、死とは人間を形作っている物質が未組織化の状態に戻り、それがまた新たな状態を形成していくだけなのだと説明をしている。一方、ドルバックも「死ぬとは眠ることである。それは、私たちが生まれ、感覚を持ち、今ある生存の意識を持つ前にいた無感覚の状態に戻ることである。私たちは自然によってその懷から引き出されたが、私たちを生まれさせた法則と同じく必然的な法則が、私たちを自然の中に帰らせ、後に、知るにも及ばない新しい形態の下に私たちを再び生み出すのだ。¹⁰」と述べており、根本的な自然観、世界観の類似性は明らかである。

この例以外にも、作中の悪人達が唱える悪徳の哲学には、唯物論の影響を受けた考え方として、共通する特徴が幾つか見られる。「自然は人間より遥かに大きな力で謎に満ちており、その法は人間には理解不能であるということ」、「自然は様々な存在や物質の寄せ集めであるということ」、「自然においては全ての存在は同等であるということ」、そして「自然に外在する超越的な神の存在の否定」等は、概して彼らが唱えていることである。言い換えれば、自然という言葉が指す範囲は現世に限られ、内在的な法に従って、人間をも含むすべての存在や物質は、その永遠運動の中に組み込まれているというのが、悪人達にほぼ共通している自然観だといえるだろう。では他方で、ドルバックらの唯物論者が語る「自然」と、サドの作中人物たちが唱える「自然」との、異なる点とは一体何なのだろうか？

ドルバックは『自然の体系』の序文において、その執筆の目的を以下のように述べている。「このように、本書の目的は、人間を自然に連れ戻し、理性に親しませ、美德を愛させ、彼が望む幸福に確実に彼を導くのにふさわしい唯一の道を隠蔽する幻影を晴らすことである。¹¹」つまり『自然の体系』の著作目的自体が、「迫害される美德と、繁栄する悪徳」というサドの小説のテーマとは、まさしく正反対なのである。例えばデルベヌ院長は、他の悪人達と同じように、またジュリエットが最後に到達した結論と同じように、自然には犯罪が必要なのだと述べ、自分は自然の法に従っているだけなのだとし、自らの行う犯罪行為と性的行為とを正当化してみせる。一方でドルバックの自然論を大々的に引用しながら、他方で彼女は、自然の法を言い訳に、ジュリエットにたった12歳の少女ロレットを犯させ、責めさいなむのである。

ロラン・バルトはサドのエクリチュールについて、「このエクリチュールにつねに輝かしい勝鬨をあげさせようとするサドの努力は、エロチックとレトリック、言葉と犯罪を相互的に汚染すること、社会的言語活動の慣習のうちにとつぜんエロスの情景の価値転覆作用を導入すること（である）。……犯罪という汚染が言説的文体のすべて、すなわち物語的、叙情的、道徳的文体、箴言、神話学的記述を犯している。¹²」と述べている。つまりここでは、ほとんどのケースにおいて社会が認めないであろう、犯罪と性の正当化を、「自然」という言葉を通して、

⁹ デルベヌは「私たちはまったく死んでしまうのよ。(略)死んだ人間はもはや存在しないと考えることほど自然で簡単明瞭なことはないし、死んだ人間がまだ生きていると考えることほど馬鹿げたことはない」(Ibid., p.218-219)と述べ、死後も自己同一性が保たれることをはっきりと否定している。

¹⁰ D'HOLBACH, *Système de la Nature* (1770), éd. copie, coda, 2008, p.165

¹¹ Ibid., p.6-7

¹² BARTHES Roland, *Œuvre complètes III, « Sade, Fourier, Loyola »*, éd. Seuil, 1971, p.728-729

唯物論的言説に結びつけることによって、それが目的とする美德の推進、「美德」というものに与えられている一般的・社会的価値をひっくり返しているといえるのではないだろうか。

脱コード化、自然描写と暴力性

デルベーン院長は「自然にとって犯罪は必要なものである」と述べていた。またジュリエットの恋人であるノアルスイユのように、もっとはっきりと「悪のみが自然の本質である」と言い切る悪人も、物語の中に登場している。つまり、他の存在・動物等と同様、人間自身もその構成要素として含まれるこの世界・自然の本質を、人間によって「悪」と名付けられたものに結びつけているのである。この結びつきは、少なくとも以下の二つのことを示していると考えられはしないだろうか？

第一に挙げられるのは、人間による善・悪の識別の絶対性への否定である。言い換えれば、人間のコードによって「善」あるいは「悪」と名付けられたある存在や行為が、自然の中においては異なる意味を持つことを示しており、すなわちそのコードからの脱却を目指しているといってもいいだろう。それは、人間という存在を超えた世界に対峙する事でもあり、人間を主体とするものの見方を放棄するということでもある。

第二に挙げられるのが、自然描写と暴力性との結びつきである。ジュスティーン・ジュリエットの物語の中で、自然描写がどのように成されているのか見てみよう。これまでの検討の中で私たちが既に触れたのは、ジュスティーンの死の原因ともなる雷であった。「稲妻が光り、風がひゅうひゅう吹き、天の雷火は雲をゆるがせ、すさまじく揺り動かしていた。自然はまるで自らの仕事にうんざりして、すべての要素を混ぜ合わせて、新しい形にしようとしているようであった。¹³」このように、ジュスティーンの最期の夜は、大層荒々しいものとして描かれている。自然は、その構成要素である個々の存在（人間をも含む）を打ち壊し、そこからまた新たな存在を生み出そうという、永遠の破壊・再生運動の真只中であって、激しくうねり動いている。雷のすさまじい一閃がジュスティーンの口から膾へと貫通して、美しい身体を「まったく恐ろしい形相」に変えてしまう。

雷以外に、サドがこれらの物語の中で好んで取り上げている自然風景として、火山を挙げることができる。ジュリエットはヴェスヴィオ火山の火口に犠牲者を投げ込み、ピエトロマラの火山の火口の淵に乗り出して男女と遊び戯れる。また、『新ジュスティーン』に登場する科学者アルマニは、シチリアのエトナ火山から流れ出る溶岩を前にして、他の悪人たち－デルベーン院長やノアルスイユ－と同様に、自然の破壊的な技術は犠牲者をつくることしか欲せず、悪は自然の唯一の要素であるという結論に至っている。つまり「悪」と呼ばれるものが、破壊性や暴力的な情景と関連するものであることを認めているのである。物語の一場面となる自然風景の描写と、悪人達の世界観として語られる観念的な「自然」という言葉とは、このように呼応するものとなっているのだ。逆に、平和で牧歌的な自然の光景などは、この物語ではほとんど描かれていないのである。

サドは火山の噴火などの自然現象に、かなり興味を持っていたものと推測できる。彼は 1775 年 7 月から 1776 年 6 月にかけて、領地である南仏のラ・コストからイタリアへ旅行をしてい

¹³ SADE, *Œuvre, Juliette ou les prospérités du vice*, éd. Gallimard, la Bibliothèque de la Pléiade, tome III, 1997, p.1258

るのだが、その途中で、実際にピエトロマラの火山に立ち寄っている。彼の著作『イタリア紀行』におけるピエトロマラの記述は、『悪徳の栄え』においてジュリエットによって語られる同火山の描写と、ぴったりと重なるものである。また、澁澤龍彦は『サド侯爵の生涯』の中で、1779年9月にサドは下男のカルトロン（イタリア旅行にも同行したお気に入りの召使）に、ヴェスヴィオ火山の噴火に関する資料を筆者させ、手紙と共に自分の元（ヴァンセンヌ牢獄）に送らせているという事実を指摘している¹⁴。

また、サドは小説集『恋の罪』の序文として書かれた「小説論」の中で、イギリスの作家リチャードソンとフィールドिंगの革新的才に熱烈な賛辞を捧げてから、想像力が生み出す小説というものに関する自分の哲学を開陳するに当たって、「自然」についても多少の意見を述べている。「自然とは、モラリストが描いてみせるよりずっと奇妙で、常にモラリストの政治学が規定しようとする枠から溢れてしまうのだ。その目的においては一樣だが、作用においては不規則で、常に動揺している自然の胎内は、人類の贅沢に役立つ高価な宝石や、もしくは人類絶滅させる火の球をほとぼしらせる、火山の内部に似ている。¹⁵」人間にとって未知のものである自然は、人間による観念の枠内には当然収まらない。火山との比例で語られることによって、それは動的で、常に揺れ動いている、激しいエネルギーを髣髴させるものとなっている。

『新ジュスティーンヌ』の中で、科学者アルマニは自然に対して、怒りの念をすら覚えている。「自然の力は私の力に勝っていて、闘いは釣り合いません。自然はその作用のみを提供し、原因はすべて覆い隠してしまうのです。したがって私は自然の作用の真似をすることしかできないのです。¹⁶」と彼は述べ、自然に対する人間の無力さを痛感している。人間は自然の一部でありながら、その原動力、つまり根底に働く力を理解することもできず、ただその法則に従うことしかできないのである。そして、溶岩や雷に象徴されるように、破壊的で暴力的なエネルギーとしての自然は、美德の徒であるジュスティーンヌや他の犠牲者たちを情け容赦なく飲み込んでしまうのである。犠牲者の死の瞬間を描くということは、その個体が、あの世において自己同一性を保てるという希望を奪われたまま、完全に解体され、破壊と再生の永遠運動の中へ吸収されていく様子を描くということに他ならない。「ジュスティーンヌ物語」と「ジュリエット物語」に登場する悪人達は、「犠牲者が死ぬ間際の身体の痙攣運動」を観察することに、異常なまでの関心を寄せ、喜びを見出している。例えば、ジュリエットはある街角で、貧しい女性をピストルで撃ち殺している。犠牲者の死の瞬間に、彼女は激しい興奮を感じる。しかし、その事件について報告を受けた、大悪人サン・フォンは、地上に倒れた女の痙攣をよく見極めなくては、せつかくの悪事も興味半減だといって、彼女を論ずるのである。

大臣サン・フォンと「悪の至高存在」

これまで、悪人達の哲学論議における、唯物論的影響と悪の正当化について、そして物語の一背景となる自然描写と哲学論議の中に登場する「自然」という言葉との関連について、それぞれ考察をしてきた。ところで、「自然」という言葉以外を根拠にして、悪人達が悪事の正当性を主張することはないのだろうか？ また、物語の筋において、唯物論的世界観と「自然」という言葉がどのような役割を担っているのか考えてみたい。

¹⁴ 『サド侯爵の生涯』澁澤龍彦、中公文庫、1983年5月、p.163

¹⁵ SADE, *Idée sur les romans* (1795), éd. copie, Arléa, 1997, p.45

¹⁶ SADE, *Œuvres, La Nouvelle Justine*, Gallimard, la Bibliothèque de la Pléiade, tome II, 1995, p.779-780

『悪徳の栄え』に登場する悪人の一人である大臣サン・フォンは、「悪の至高存在」という、悪の本質を持つ神について語っている唯一の人物である。彼は自らの悪事を、この世を創った神の悪の本質に還帰している。「神は存在している。何らかの手が、私が見ているすべてを創造したに違いない。しかし、その手は悪のためにそれらを創り出し、悪においてのみ楽しみ、悪はそいつの本質なのである。その手が私たちに犯させることは、その計画に必須なのだ。¹⁷⁾」と、彼は説明する。サン・フォンに従えば、世界を創り上げた神は、極めて復讐心が強く、極めて野蛮で意地悪く、不公正で、残酷な存在なのである。そして「悪、あるいは悪と呼ばれるもの」が、神または神の似姿として創られた者の本質であるならば、神は悪意を持って被造物を扱い、被造物も悪意を持って振舞うことで、悪の連鎖は永遠に続くと言断できることになる。

ここでサン・フォンが「悪、あるいは悪と呼ばれるもの」という表現を選んでいることに注目したい。彼は、神や神の似姿である人間の本質を「悪である」と断定しながら、他方で善・悪の呼び名が決して絶対的なものではなく、そう呼ばれているのに過ぎないことを、くり返し強調している。彼の言に従えば、世界を創った神の本質が悪であり、悪が必然的なものであるならば、「悪」という言葉を割り当てられた概念にこそ問題があることになる。言い換えれば、人間によって名付けられた「善・悪」は、自己の内に原因を持たないものなのである。

サン・フォンの「悪の至高存在」が、グノーシス主義の創造神と多くの類似性を持っていることは、多くの研究者によって既に指摘されている。クロソウスキーは『わが隣人サド』において、「サン・フォンのいう悪の至高存在は、マルキオーン¹⁸⁾の造物主（デミウルゴス）の、あらゆる特徴を備えて¹⁹⁾いる」と述べている。そして、物語の中でもサン・フォンのみが言及している、この「神」という存在の肯定が、サド研究者たちによる、彼を無神論者とみなすべきか否かという争点の一つにもなっている。

グノーシス主義は、キリスト教とほぼ同じ時期に地中海世界の東方地域で発生し、紀元二～三世紀には地中海世界全域および中東に広まった。大きく分けて、キリスト教系グノーシス派と非キリスト教系グノーシス派の二つが存在するが、根本の宗教観は共通している。両派とも、物質界と精神界という二元論に特徴がある。この世、つまり眼に見えるこの物質界は、悪の化身である造物神（デミウルゴス）によって創造されたため、悪が横溢する世界になったのである。キリスト教系グノーシス派において、この悪の神はヤハウェと同一視されたが、イエスの父である神とは区別されたため、この一派は異端視されることも多かった。グノーシスとは古代ギリシャ語で「認識・知識・叡智」などを意味している。人間はグノーシスを通じて、腐敗した物質界から、真の神が創りだした善の世界、精神界へと救済されるというのが、グノーシス主義の一般的な説明である。

酒井健の論によると、バタイユは『低い唯物論とグノーシス』において、グノーシス主義の内実は人間の救済ではなく、観念性へのアンチ・テーゼとしてむしろ物質世界を肯定し、身体性や感覚を重要視した姿勢にあると述べている²⁰⁾。それは物質界、つまり人間の外部の自然状態の肯定でもあり、人為的な善悪の識別への否定であるとバタイユは説き、そこには近代以降

¹⁷⁾ SADE, *Œuvres, Juliette ou les prospérités du vice*, op. cit., tome III, p.533

¹⁸⁾ 2世紀のローマで活躍した、小アジアのシノペ出身のキリスト教徒。その思想にはパウロへの強い傾倒と、グノーシス主義の影響が見られた。

¹⁹⁾ KLOSSOWSKI Pierre, *Sade mon prochain*, op. cit., p.142

²⁰⁾ 『バタイユ』酒井健（青土社、2009年）

の人間理性偏重主義への批判も込められている。²¹⁾

ところで、サン・フォンは「悪の至高存在」を信じることで、人間の魂の救済を期待していたわけではないものと思われる。というのも、彼は「被造物は悪に浸されて存在し、寿命が尽きると悪の胎内に還っていく²¹⁾」と明言しているからである。ジャン・パティスト・ヴィルマーはこれについて、「この理論は確かにマニ教（グノーシス主義の一派）から借りてきたものであるが、グノーシスの二元論を一元論に置き換えている。²²⁾」と説明をしている。つまり、魂の救済の部分は、サン・フォンの論からは排除されている。サン・フォンによれば、この世においてどんな行動を取った人間であっても、死後はもっとも微弱な状態となって、悪の胎内へと吸収され悪の分子に統合され、やがて再び新たな邪悪な存在を生み出していくのである。

サン・フォンは邪悪な神の存在について説く一方で、他の悪人達同様「自然」という言葉も用いている。「破壊、悪事、暴虐は、自然が私たちの心に刻み込んだ最初の性向であり、私たちは激しさに程度の差こそあれ、備わっている感受性の度合いに比例して、その性向に身を任せるのである。²³⁾」つまり、ここで私たちは再び、自然が人間に与えた性向に原因を求めることで、悪事を正当化する論理に行き当たるわけである。更にサン・フォンは自然という言葉、次のように言い換えてもいる。「自然の胎内、つまり悪の胎内から生まれたすべてのものは、そこに戻るのである。これが世界の法則である。このように、性悪な人間の憎むべき要素は、神である悪意に吸収され、翻って再び別の存在に生命を吹き込むのである。²⁴⁾」ここでは、「自然」と「悪」、そして「神」とがほぼ同義で用いられている。すなわち、サン・フォンが信奉している「悪の至高存在」とは、グノーシス主義の影響を受けている一方で、他の悪人達と同様、唯物論的な世界観とも重なり合っているといえるのではないだろうか。

サン・フォンの肯定する「至高存在」が、唯物論的な「自然」と類似する発想下にあるものならば、彼を他の悪人達から区別しているものは、むしろ他の点にあるといっている。それは、魂の不滅性についての彼の見解である。すべての存在が、自然の胎内に還っていくという考え方は、他の悪人達が唱えている哲学論議の内容と、表現の差こそあれ、概ね共通している。しかし、サン・フォンは、来世への希望を捨て去ることができず、この世で犠牲にした者たちに来世で報復されることを恐れている。また、死後も犠牲者たちに苦痛を与え続けたいと欲する一方で、自分は来世ではなるべく苦しみたくないと願っている。ジュリエットと友人のクレールウィルは、彼のこの態度を激しく批判している。彼らの見解の相違は、サン・フォンとクレールウィルの次のような会話に顕著に現れている。「(サン・フォン)『私はこの世で犯罪を重ねて、あの世でより苦しまなくても済むようにしているのだ。』『私としては』とクレールウィルは言った。『犯罪で身を汚すのは、それが楽しいからで、自然の役に立つ方法の一つだと思っているからだわ。私が死んでも何も残りはしないし、この世でどのように振舞っていたかなんて、どうでもいいのよ。』²⁵⁾」

ここで、唯物論についてもう一度振り返ってみたい。唯物論とは、ドルバックの『自然の体系』に関する前述でも触れたことだが、死後の世界や魂の不死性を基本的には認めないものである。サン・フォンの世界観は、グノーシス主義の二元論のうち、悪に満ちた物質界という一

²¹⁾ SADE, *Œuvres, Juliette ou les prospérités du vice*, op. cit., tome III, p.534

²²⁾ VILMER Jean-Baptiste, *La religion de Sade*, Les Éditions de l'Atelier/ Éditions Ouvrières, Paris, 2008, p.38

²³⁾ SADE, *Œuvres, Juliette ou les prospérités du vice*, op. cit., tome III, p.459

²⁴⁾ *Ibid.*, p.534

²⁵⁾ *Ibid.*, p.539

方のみを取り込み、更に唯物論的世界観と重ね合わせることで被造物の魂の救済を否定し、死後も被造物が自己同一性を保つことを否定しているように一見解釈できる。だが、来世への希望と恐怖を捨てきれないために、唯物論的世界観を徹底できず、神秘主義に走ってしまっているのだ。

主人公ジュリエットとサン・フォンは、ここで来世に対する見解を巡って小さな相違を互いに感じ取っている。だが、彼らの意見がすれ違うのは、この場面ばかりではない。悪人としてまだ未成熟なジュリエットは、やがてサン・フォンの怒りを買ってパリを追われる羽目に陥る。サン・フォンの追っ手から逃げ回るために、ジュリエットはフランスとイタリアを長い間旅して回ることになる。物語の終わりに、様々な経験を経て大悪人に成長した主人公がパリに帰った時に待っていたものは、恋人のノアルスイユの手によるサン・フォンの死であった。

サン・フォンの死と、ラ・デュランの生還

ジュリエットは各地を旅行する中で、様々な悪人達と出会う。その各々が彼女の思想・生き方に影響を与え、彼女を成長させているのだが、最終的にジュリエットが手をとって一緒に生きていこうと願う人物は、占い師ラ・デュランと、恋人のノアルスイユである。逆に言えば、その他の人物から悪徳について一通り学んだ後、彼女は手の平を返して彼らを切り捨て、財産を奪い、場合によっては情け容赦なく殺してきたのである。つまり、ラ・デュランとノアルスイユとは、ジュリエットの厳しい篩い分けを潜り抜け、見事な大悪人に育った彼女の思想にもっとも寄り添う者たちだということになる。

ラ・デュランは、占星術、毒薬調合などに長けていて、ジュリエットをして「魔女」と呼ばしめる人物である。彼女は人間の魂の問題について、他の悪人達同様自らの悪徳論を述べているのだが、その際に「神性の理論についてと同様に、魂の理論についても私は唯物論者なのよ。²⁶」と、自らの思想的立場を明確に表している。彼女の言によれば、魂とは（人間の魂も動物の魂も）、太陽に起源を持つ、限りなく繊細な物質であるエーテルの一部分に他ならず、宇宙におけるもっとも純粋な火のようなものである。人間が死ぬと、この火は発散して、常に現存し常に動き続けている同じ物質の普遍的な塊に結合される。そして残された肉体が腐り、別の形を取って再編成されると、この宇宙の火の別の部分がやってきて、命を吹き込むのだ。

ここで私たちは、魂を太陽からのエーテルと称する部分にこの論の固有性を見出すものの、おなじみの、「死後の解体」、「宇宙（場合によっては「自然」もしくは「世界」）への吸収・結合」、「新たな存在の再編成」という説明に出くわすこととなる。そして、自らの唯物論的立場を明言するラ・デュランは、当然のように来世への期待を否定している。彼女が、「地獄や天国という滑稽な考え」という言葉を使って、来世をきっぱりと否定するとき、私たちはサン・フォンによって語られた来世への期待と恐怖とを思い出さないわけにはいかない。つまり、唯物論的世界観を徹底できず、来世への期待という神秘主義的傾向を見せたサン・フォンに対して、ラ・デュランは死後の世界への希望・恐怖をまったく持たず、自らを「唯物論者」であるとはっきり名乗っているのだ。

ジュリエットとクレールウィルはラ・デュランの家を訪れ、そこで数々の不思議な光景を目の当たりにして立ちすくむ。例えば、魔女ラ・デュランが呪文を一言唱えると「年取った空気

²⁶ Ibid., p.667

の精」がどこらかともなく現れ、放蕩と拷問の手伝いをする。また、粉を庭に撒き散らすと、地面が割れて埋められていた遺体が姿を現す。彼女の屋敷では、金銭さえ払えば望みのままの放蕩が可能であり、好みの犠牲者がやはり呪文一つで手に入るのである。「おやおや」とラ・デュランは、ジュリエットに話しかける。「私のことが怖いのか」「怖がっているですって！いいえ、でも私たちはあなたのことが分からないのよ。」というのが、ジュリエットの答えである。それに対して、ラ・デュランは「自然のすべてが私の意のままになるのよ。自然はいつも、それを研究するものの意図に従うでしょうよ²⁷」と返事をしている。

この論文の前述部分²⁸で、唯物論の影響を受けた悪徳論の特徴の一つとして、「自然は人間より遥かに大きな力で謎に満ちており、その法は人間には理解不能である」という考え方を挙げたのを振り返ってみよう。人間は自らがその構成要素である自然の法を完全には理解できず、逆に捉えればそれは、人間の理解の範囲を超える「自然の法」の前では、人間による善・悪等の識別は絶対性を持たないということでもあった。ラ・デュランは、ジュスティーン物語・ジュリエット物語の四つのテキストを通じて、「自然の奥義に精通し、自然を意のままにできる」唯一の人物である。普通の人間には理解不能な自然を意のままに操れる彼女は、他の人間にしてみれば（ジュリエットをしても）「分からない」存在だと言ひ表すほかないのである。

ラ・デュランは物語の中で、ヴェネチアにおいて一度死んだと思われている。ジュリエットでさえも、それらしい遺体を見せられて、彼女の死をまったく疑いはしない。しかし、物語の最終部で、妹ジュスティーンの落雷死を目の当たりにして、ますます悪徳に励むことを決心したジュリエットが、「おお自然よ！」と熱狂的に呼びかけると、一台の馬車が現れ、死んだと思われていたラ・デュランがそこから降りてくるのである。ジュリエットが、サン・フォンを殺したノアルスイユと、徹底した唯物論的世界観を持ち、自然を具現化したような女性ラ・デュランの手を取ったところで、物語は終わりを迎えている。

結論

サドは「迫害される美德と、繁栄する悪徳」というテーマに固執し、美德の徒ジュスティーンと、悪徳の道を突き進むジュリエットという、対称的な姉妹の物語をくり返し書き続けた。このテーマについては、クロソウスキーやバタイユなど、多くのサド研究者たちによって、彼の宗教的視点の考察とも絡めて、これまで論じられてきた。

ジュスティーン物語の第一版・第二版と、ジュリエット物語を付す第三版とでは、結末は大きく異なっている。作中人物たちが唱える悪徳の哲学は、唯物論的世界観を受け継いでいるが、唯物論を「悪徳の正当化」のために用いているところが注目すべき点である。これは、人間による善・悪の識別コード、特に「美德」という価値の絶対性を転覆させることであった。

悪人達が用いる、「自然」という唯物論の影響を受けた言葉は、哲学論議の中で観念的に語られているばかりでなく、物語の一舞台となる自然描写とも呼応している。サドはジュスティーン・ジュリエット物語の中で好んで、溶岩が流れる火山や、雷について描いており、人間自身をもその構成要素として含む自然の暴力性を、犯罪性へと繋がるものとして捉えている。逆に言えば、穏やかで牧歌的な風景などは、この二つの作品中にはほとんど登場していない。

²⁷ Ibid., p.663

²⁸ 前述「唯物論と自然」

スピノザとドルバックの『自然の体系』という唯物論の手ほどきから出発したジュリエットは、多くの悪人に出会って感化され、次第に大悪人へと成長していく。だが、それらの悪人達も、彼女の傍に留まり続けることはできず、多くの場合、彼女によって殺され、或いは騙され、彼女の成長と共に振り捨てられていく。

大臣のサン・フォンは、悪人たちの中でも非常に特異的な哲学論議と宗教観を持つ人物である。彼はグノーシス主義の影響を受けた「悪の至高存在」を想定するが、それは同時に唯物論的影響も色濃く持つものであった。しかし、彼の唯物論は徹底しておらず、来世への希望と恐怖を語ることで神秘主義的側面を見せたサン・フォンは、ジュリエットと激しく敵対していくことになる。彼の存在は、物語の最後には抹消されている。

一方、別の登場人物ラ・デュランは、サン・フォンとは対称的に、徹底した唯物論者であり、来世への希望を否定する。彼女は「自然」を理解し、操ることのできる唯一の人物である。唯物論の書物を勧められることから始まったジュリエットの物語は、自然を具現化する人物の手を取り、理解できないにも関わらず、それさえも受け入れて共に生きることを決意するところで終わっている。それは取りも直さず、徹底した唯物論的世界観を受け入れ、死後の自己同一性を期待しないことで、世界の構成要素である個体が絶対的に「死すべき」存在であることを認め、人間による善・悪の識別を越えた暴力性によってそれが解体される瞬間を眺めていくことでもあるのだ。

参考文献

- Barthes (Rolands), *Œuvres complètes III, « Sade, Fourier, Loyola »*, Seuil, 1971
- Bataille (Georges), *La littérature et le mal*, Gallimard, 1957
- Delaporte (André), *L'idée d'égalité en France au XVIIIe siècle*, Presses Universitaires de France, 1987
- Deleuze (Gilles), Guattari (Félix), *Capitalisme et Schizophrénie I, L'Anti-Œdipe*, Minuit, 1972/1973
- Delon (Michel), *Le savoir-vivre libertin*, Hachette Littératures, 2000
- Delon (Michel), *Le Magazine Littéraire, Sade les fortunes du vice*, « Typologie du pervers », N.15, 2008
- Holbach (Paul Henri Tiry), *Système de la Nature* (1770), éd. copie, coda, 2008
- Klossowski (Pierre), *Sade mon prochain, précédé de Le philosophe scélérat*, Seuil, 1947, 1967
- Laclos (Choderlos), *Les Liaisons dangereuses* (1782), éd. copie, Librairie Générale Française, 2002
- Lely (Gilbert), *Vie du marquis de Sade*, Gallimard ; 1952-1957
- Sollers (Philippe), *Sade contre l'Être suprême, précédé de Sade dans le Temps*, Gallimard, 1996
- Vilmer (Jean-Baptiste Jeangène), *La religion de Sade*, Les Éditions de l'Atelier/ Éditions Ouvrières, 2008
- 酒井健『バタイユ』(青土社、2009年)
- 澁澤龍彦『サド侯爵の生涯』(中公文庫、1983年)